
Take pictures

冥沙

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Take pictures

【Nコード】

N1673L

【作者名】

冥沙

【あらすじ】

普通の高校、佐間高校に入学した三人。彼らは高校ではじめて出会う。自己紹介から異色を放った椎名凜也。彼と席が近く仲良くなった写真好きな萩野丘。写真を撮るのが上手いクラスメイトの女子、香坂紀莉。三人は写真部に入ろうとしていたが、そこは廃部寸前。写真部をもう一度たてなおすために彼らは力をあわせる！三人は一見ただの高校生に見えるが、はたしてそれぞれがオモウコトは…？

彼らのオモウコト。1

「俺の名前は椎名凜也。好物はおにぎり。特にオススメなのはツナマヨおにぎりだな。」

コレはもはや神の領域だろ……。香りがもう、最高だ！ 週に七回は食べる、いや一日に一回と言った方がはやいな。どこのコンビニでも安く売っているから入手も簡単だろ？

今日は全員帰り道にツナマヨを買うようにな！」

*** 椎名凜也 side

なんで、こんなにツナマヨおにぎりを推しているのか……？

————それは、目の前にあったから。

————本当はそんなに興味ねえ。

そうさ、ウソだからな。ただの作り話。所詮自己紹介なんてそんなもんだ。

今日、俺は高校一年生になった。家から電車で30分、それから徒

歩20分。近いのか、遠いのか……佐間高校に通うことになる。

特に苦勞して勉強したわけでもない。でも怠けてたわけでもない。俺の学力で行けるなかで、家から近いところを選んだだけだ。家から徒歩3分で木谷高校に行ける。

でも、世の中そんなに甘くない。そこはもう立派な天才くんの高校だ。俺の行くようなところじゃねえ。

そこで、さっそく恒例の自己紹介というわけだ。悩みに悩んだ。何を言えればいいんだ……。普通なら、緊張するだけで、そんなに悩むことはねえのかな？

末に、結局、前の席の男が食ってたツナマヨおにぎりのことを話題にしてみた。ほら、オレ完ぺき、やればできる子でしょ。

……ジョークだけだな。

周りはちよこつと、ざわざわしてる。きっと緊張をまぎらわせたいんだろうなあ。だからって俺のあとに丁度っていうのもなあ……。複雑なもんがある。……あれ、もしかして俺、自己紹介ミスった？

自己紹介を終えた俺は、なんとなくしに前の席のやつ、確か萩野丘と言ったかな。その丘を見ている。

どうやら新しい環境に不安なのか、きょどっているように見える。
いや、びびってんのかな？

まあ、関係ねえか。なんとなくだが、高校での初友達は丘になる気がするな。このH・Mが終わったら、話しかけてやろう。

「桜が綺麗に咲いている今、入学おめでとうございます。この桜のように美しい高校生活になるよう、皆さん楽しんでください。」

って、おい。桜のようになって言ったら、散っちゃうだろ。一瞬の夢ってことだぞ、それ。よくねえだろ。

俺が思わずつぶやいてしまったのが聞こえたのか、丘がすこしうなずいているのが見えた。

「同じクラスになれたのも何かの縁です。積極的に話しかけて絆を深めていきましょう。」

なんか、こいつ校長の話みたいだな。担任はもう少し義務連絡じゃねえのかよ。

「今日はホームルームが終わったら下校です。部活動の見学は明日からとなりますので、気をつけて下さい。仮入部を希望する方は、今から用紙を配布しますので、今週中に提出するように。教科書の配布は明日の朝に行います。大きなかばんを持ってきた方が良いでしょう。」

へー。部活かあ。どーすっかな。特にやりたいことなんてねえしなあ……。

「これで大体のことの説明は終わりました。明日からもう授業が始まりますので、しっかりと準備をしてきてください。」

どうやら、担任の長い話がやっと終わったみてえだな。聞いてて価値なんてない話だったが、教師としてのめんどくせえ建前でもあるんだろ。どいつもこいつも教師の話っちゅーのは、だるいったらありやしねえ。

やっと丘に話しかけられるな。先生話なげえんだよ……。最初は難しいいくか。俺は丘の肩を軽くたたく。丘がびっくりしたように振り向いた。

「なあ、俺は椎名凛也^{しいなりんや}。これからよろしくな。」

「あ、ああ。俺は萩野丘^{はぎのおか}。こっちこそよろしく！」

さわやかな好印象なやつだな。

「じゃあ、丘^{おか}って呼ぶからな。丘^{おか}って丘^{おか}とも読めるし。俺のことは凛也で。」

「……！　そう。じゃあ凛也って呼ばせてもらうよ……。」

「凛也、俺、お前と前に会ったことあるか？」

「いや、俺と丘は　はじめましてなはずだけど？」

「そ、そうだな。ごめん、変なこと聞いて。」

「ん、いいけど。何でそー思っただんだ？」

俺が聞いたら、丘は目を宙に泳がせた。

「別に、なんとなく…。それよりもさ、凜也は部活どうするつもり？」

あからさまに話を変えてきた。とりあえず、丘の話に合わせておくかあ。

「部活ねえ…。まだ決めてねえんだよなあ。」

「俺は写真部に入ろうと思ってるんだ。」

「へえ！ 意外。スポーツやりそうなイメージなのになあ。」

そうだな、丘はサッカーとか爽やかにゴールきめて女の子にきやうって言われてそうだろ。

「そう？ 実際はそうでもないんだけどね。良かったら、凜也も写真部どう？」

「写真部かあ。考えとく。」

写真なんか集合写真とか旅行ぐらいしか撮らねえしなあ、俺。どうだろう。

「うん。見学だけでもいいからさ。行く気になったら言ってくれよ。」

「いいかもな。俺でも見学ぐらいなら大丈夫だろ。じゃあさっそく明日行かねえ？」

「OK 明日の放課後で。予定入れちゃダメだぞ。」

「ww そういう丘こそ、ドタキャンは勘弁してくれよな。」

「残念！ 彼女とデート入るかもっ。」

「ひどっ。俺だけドタキャンダメなのかよお。」

「なーんちゃって。あいにく俺には彼女いないから大丈夫だよ。」

「お前なあ……。」

丘と話してるのは楽しいな。けっこうノリが良い。

「じゃあな。また明日、丘。」

「写真部の件忘れるなよ、凜也。」

「分かってんからっ。」

俺たちはそれぞれの家の方向にわかれた。

はじめてにしては打ち解けられたほうだな。明日が楽しみかもしれないえ…。

「ただいま。」

家に帰った俺はまず部屋へ向かった。

「おかえり凜也。学校どうだったのー？」

母の声がしてくる。キッチンで料理でもしているのかもな。

「べつに普通ー。」

いちいち大声をだして話さなきゃなんねえのが面倒くせえ。

「もっと詳しく話さないよー。」

また母がなんか言ってきたがもういいだろ。無視ムシ。明日の準備をさっさと終わらせようと、学校で配られた予定表を見る。別に二日目はそんなに荷物もねえな。かばんの整理も特にしなくてもよさそうだ。暇になった俺は、ぼーっと部屋の窓から空を見上げていた。

「ココが写真部…？」

丘が戸惑ったように言った。俺らは今、写真部の見学のために部室に来ている。

「ああ、そうみたいだな…。」

「そんなこと言ったってさ、凜也はこのただの教室が写真部に見える？」

「いや、見えねえな。」

俺はきっぱりと断言する。失礼なことを言って先輩が怒らないかとかは考えなくてもいい。

なぜかって、そりゃ。

「だって人も誰一人いないじゃんか。」

タイミング良く、丘が嘆くように呟いた。それにしてもなぜ誰も居ないのだろう。

見学の生徒が来る日なのだからせめて案内の紙ぐらいはあってもいいんじゃないのか？

トントン、ノックが聞こえてから扉が静かに開いた。

俺たちがそろって困惑している間にだれかが来たようだ。

「失礼します、見学に来たのですが。」

そう言ってあたりを見回した。

どうやらそいつも俺たちと同じ立場のようだ。

「えっと、同じクラスの……椎名くんと萩野くんだよね。」

だれだっけ。あっちは知ってるみたいだけどよくわかんねえ。

俺は丘にアイコンタクトをはかるが、丘もきよんとした顔をしている。

「あ、ごめんね。わたしはクラスメイトの香坂紀莉^{こうさかきり}。」

「ごめん！ まだクラスメイトの顔覚えてなくてさ……。」

丘は申し訳なさそうに目じりを下げた。

「まだ二日目なんだから当たり前だよ。」

なんでもなさそうに香坂さんは笑った。

気のせいか、すこし寂しそうに見えんのは俺だけか？

丘は香坂が気になってないと言っても納得していないみたいだ。

「でも香坂さんは俺たちのこと知ってたじゃん。」

「まあ……ね。二人は目立つから。」

「俺たちって目立ってんの？ やばっ。」

「そんなわりいことしてねえはずなんだけどなあ。」

俺はさすがに高校生活二日目で、問題起こすほどのやつじゃねえと、自分では思ってたんだがなあ。
無意識下に睨みつけてたとかか？ ……ありえるからなんともいえねえ。

「ちがうよ。」

香坂はすぐさま俺たちの言葉を否定した。俺には、その口調はどこか鋭いものがあるように感じられた。香坂は俺たちのことを嫌っているのだろうか。
だが、後続く香坂の言葉でそんな考えも消えた。

「カッコイイからみんな見惚れてるんだよ。いいなあ、女から見ても羨ましいもん。
モテない男子にさっきみたいなこと言ったら怒られちゃうよ。」

どうやら鈍い俺たちに呆れたのと、心配をしてくれたみてえだ。疑ってスマン。

むしろいいやつっぽい。

「香坂も写真部入るのか？」

香坂なら女の中では話しやすいし入ってほしいと思う。

「今悩んでるところ。二人はどうするの？」

「俺は入るよ。先輩たちとか部活の雰囲気とか全然分かんないけど

さ、やっぱり俺は写真好きだし。」

丘は堂々とした顔で宣言した。部活の様子も分かんねえのにすげえな。こどもの言う見栄っ張りのように微笑ましくて、俺は笑みを浮かべた。

「萩野くんって写真部ってかんじだもんねー。」

香坂もそんな丘に思わず笑いをこぼしている。

「俺は丘についてきたようなもんだからな。どうするかなあ。」

俺も一応答えておく。全然参考になんないだろうが。

「そっかあ。じゃあ、すぐに決めなくてもいいし、わたしはまだ考えるね。」

先輩のこととか、部員については明日にでも先生に聞けばいいかな。

「

「そうだな。俺たちが聞いたくから、放課後に香坂に伝えるのはどうだ？」

俺は香坂に了解を求めるために問いかけた。

「ありがとう、そうしてくれるとわたしもありがたいな。でもみんなが居ないときにしてね。」

「はあ？　なんでだよ。」

なんでそんな面倒くせえこと考えなきゃいけないんだ。

「だからね、二人はモテるから嫉妬されるでしょ。あいつ何よ、ブスのくせに、って言われちゃう。」

香坂はまた呆れたように俺に目を向けてきた。若干傷つく。それに……香坂はブスじゃないと思うんだけどな。むしろかわいいかんじもするぐらい？

「先輩もだれもないし、わたし今日はそろそろ帰るね。」

言っと思ったらすぐに行ってしまう、香坂はもう背中しか見えな
い。

あわてて俺たちはさよならを言う。

「おう。じゃあな、香坂。」

「香坂さん、また明日。」

俺たちの言葉に、香坂は片手をかるく上げて応え、振り返らずに歩いていった。

俺たちは顔を見合わせ、

「なんか、せかっちだな？」

「見た目とちがうよね、香坂さんって。」

それぞれが自分が思ったことを、だがどちらも思ったであろうことを言った。

彼らのオモウコト。 1（後書き）

はじめまして。

亀更新ですがよろしくお願いします。

彼らのオモウコト。2（前書き）

短いですが、萩野丘視点です。
時間は、自己紹介のときぐらいです。

彼らのオモウコト。2

**** 萩野丘side

俺は、今日誰よりも早くこの佐間高校に来た。わくわくしていたんだ、新しい生活に。

すぐにでも学校を、教室を、クラスメイトを、見てみたかった。でも、ものには限度がある。

そう、はやく来すぎた。三時間前についてしまった。幸い、先生方はもういらっしゃったが、まだすこし準備がのこっているとのことだ。それまでそこの椅子にでも座っていなさい、と言われた。

窓ガラスを割って教室に入ってやる！　なんてどこぞのバカみたいなことはできない。度胸がないから。いいこともないし、第一やる意味がない。

そして、ずっと桜の下のベンチに座っている。

暇だ。何もすることがない。どうすればいいのだろうか。

まあ、早く来すぎた自分が悪いのだけれど。

こうも時間が有り余ると余計なことまで考えてしまう。もしや、先生たちは宇宙人で、新入生をさらおうとしているんじゃないか……。うん。自分でも分かった。ありえない。

さっきどこぞのバカだと言ったが、これでは自分がバカじゃないか。考えているうちに腹がへってきた。だめだ、使い慣れていないものは駆使するべきじゃないな。考えたことがまたバカらしい。思い出すとむなしい。

やばい、おなか鳴った。

ふと、まだ新品でキレイなかばんを見る。なんか食べ物入ってないかな。

そうだ。母に持たされたおにぎりがあった。

「なんかあつて、おなか空くかもしれないでしょ。ほら、かばんに入れとくからね。」

鮮明に聞こえてきた母の温かい言葉。そういえば今朝言っていた。ツナマヨ味は食べたこと無いからこわいけれど、このさい仕方ない。意外なところで役に立つんだな。そう思ってふうを開ける。

「もぐ、もぐ……」

感想。意外と香ばしくてうまかった。母には感謝、感謝。

先生達が動き出した。どうやら入学式が始まるようだ。まだ、満腹度30%なので微妙だけど、退屈は解消される。

ほっ、と息をはく。二月頃には白くなった息も、今はもうなくなり、むしろ桜の桃色に目が惹かれる。

ああ、もう大丈夫だ。あのときとは違う。新しい学校だ。すべては変わったんだ。いや、変えたんだ。そのために、俺は一人暮らしをしてまで、学区外の遠い高校まで来た。

さようなら、××××。俺の生まれた地。

正直、不気味だと、思った。

入学式は無事に終わり、はじめて教室に足を踏み入れ、自己紹介。みんな、緊張しつつも定番の挨拶をして終えていく。俺もそうだった。でも、おれの次に自己紹介したやつは違った。

俺がさっき食べたばかりのおにぎり。いきなり、ツナマヨおにぎりをあつく語ったのだ。奇妙な一致を感じながらも、それまでは良かった。おかしい発言により、クラスはざわざわしていたが、それでも、だ。

世間の常人メーター範囲内だったと思う。

そいつが次に放った一言よりは、まだましだった。

「ホントは興味ねえけど。目の前にいたから。」

ぼそつと、そう、丁度俺にだけ聞こえるぐらいの大きさでつぶやいた。

先ほどの明るい自己紹介とはうって変わった声調。

短い言葉だったが気づいてしまった。

————別に好きなわけじゃないけど、ツナマヨおにぎりを食べてた人間がいたから言ってみた。

そいつはそう言いたいのだ……！

なんで、知ってんの？ 俺が食べてたのはいつだ？

答えは簡単。こいつがいないとき。さっき。

そこまで考えて、ふと冷静な頭に戻った。本当にこいつは見えていなかったのか。もしかしたら、その時居たのかも。その考えに至ったとき、顔が赤くなった。

なにを取り乱していたのだ。そうだ。そう考えれば知っていてもおかしくない。納得がいく。当たり前のことだったのだ。焦りすぎた。

だとしても、こいつ、椎名凜也がすこし変なのは同じだ。普通、見ていたとしてもそんなことを自己紹介で言うか？

……。考えても仕方がない。きっと椎名はそういう人間なのだろうから。

ああ、やっぱり人間って分かんないな。

彼らのオモウコト。3

**** 凜也 side

「先生に聞いてみようぜ、写真部のこと！」

丘が授業終了のチャイムと同時に駆け寄ってきた。先生とは、今授業をしていた英語の先生のことだろうな。

「たしか、あいつ写真部の顧問だったよなあ？」

「部活動案内に書いてあったから、多分。ほら、先生行っちゃうって。早く！」

俺は丘に手を引っ張られて連れて行かれた。

丘は歩いていた先生を呼び止めた。

「先生ー！ ちょっといいですか。」

「はい、どうしたんですか。」

英語の先生は足をとめ、丘の方へ顔を向けた。

「写真部って部員いるんですか？」

丘は直球の質問を投げかけた。

「二人だけですね。まあ、彼らもあまり部活には出ていないのが…。」

「ええ！？ 部活成り立ってるんですか？」

「残念ながら、今年で部員数が届かなかったら、廃部になる方向になってきていますね。」

「そうなんですか…。ありがとうございました、先生。」

「いえ。萩野君が入ってくれるといいのですがね。椎名くんもぜひ、写真部へどうぞ。」

話は終わったようで、先生は急いで次の授業の場所へ向かっていった。

俺はうなだれている丘に話しかける。

「残念だったな。廃部寸前だったよ。」

「大丈夫だよ。俺と凜也と、香坂さん、少なくとも三人入れば。」

口では言いつつ、丘はがっかりしてるみてえだ。

「そうだな。あとで香坂にもこのこと言わねえとな。」

「放課後探さないと。」

もし放課後しばらくたってねえのに、学校が終わった直後に話しかけたら、目立つから香坂に怒られそうだ。

「写真部の部室に居るんじゃないね？」

「たしかに。あの香坂さんだし、気をつかってくれるかも。」

ああ、と俺も頷いて次の授業の準備を始めた。

「あ、いた。香坂さん。」

凜也の予想が当たったね、と隣で歩く丘が嬉しそうに笑いかけてきた。考えたとおり、放課後、香坂はやはり写真部の部室の前にいた。

俺たちが来たことに気づいたようで、香坂はこちらに振り向いた。

そしてうすく微笑んだ。

「昨日ぶり。萩野くん、椎名くん。」

「やつほー。香坂さん。」

丘はにこやかに返事をし、俺はかるく手をあげて応えた。

「あのさ、萩野くんっていわれると、なんかむずがゆいな…。」

丘は気まずそうに目をさまよわせている。

「じゃあ、萩野って呼ぼうか？」

香坂はさばさばしているようで、あっさりと言った。丘も安心したようだ。

「そうしてくれると楽。ありがと。」

「俺も椎名くんじゃなくて椎名でいいからな。」

俺もついでに言っておく。

「分かった。写真部のことは先生に聞いてくれた？」

香坂は俺のこともさらっと流した。

「廃部寸前らしいよ。」

丘がかなりコンパクトにして答えた。

「へえ、そう。写真部にカップルの先輩がいるって本当？」

「カップル？」

丘が逆に聞き返した。俺がフォローを出す。

「幽霊部員っていう二人のことじゃねえか？」

「そうかも。なら別にいいか。」

丘はぼへつと言った。

「わたしは誰が居てもいいんだけど、クラスメイトがそのカップルには注意しろってね。」

「クラスメイト？　もう友達なんだ？」

丘がどうしてもよそんなことを香坂に聞いている。そこはスルーしてもいいんじゃないね。

「ううん。ただのクラスメイトじゃないかな、まだ。よく知らないしね。」

香坂もかなりドライなことを言うなあ。ひでー。

「それにしても廃部寸前っていうのはいただけないわね。」

「三年間お世話になるもんだからな。」

そのカップルみたいに幽霊部員になっても面白くねえしな。そこで必死そうに丘が言葉を続ける。

「逆にいいんじゃない？　俺らで勝手にできるじゃん。」

それは…魅力的だな。いいかもしんねえ。

「安心して。なにがあろうとわたしは写真部に入るから。できれば萩野と椎名、三人でがんばりたいね。」

丘の様子に苦笑しつつ、香坂は写真部に入ることを伝えてきた。

「そうだな、三人でいい部活にしよう。」

俺もこの三人なら楽しい気がするし。

「二人も入部するんだ！　楽しみ〜。」

なんだかんだで一番写真部に入りたがっている丘は俺たちが入ると聞いて嬉しそうだ。

「入部届っていつまでなんだ？」

「今週中。だから萩野と椎名は最終日に出してよ。」

俺の質問に香坂がこたえてくれた。でもよく分かんねえこと言われた。

「は？　最終日？」

なんで俺たちは最終日なんだよ。早いほうがいいじゃねえか。

「あなたが入ると知ったら、もれなくファンがついてくるでしょ。その防止策。」

「あ、ああ…。すまん。」

香坂につめたい視線を浴びた。まじ、そこまで考えるなんて香坂

ってすげえのな。俺たち程度で人が動くのは納得できねえが……。

香坂が俺の顔を見て何かを思ったのか、話し出す。

「女子の根性なめちゃだめだよ。それこそ先生にでも聞けばすぐ分かることだしね。」

「女子って、こええのな…。」

「さあ。もしかして男子だっているんじゃないの。」

「…………。」

こわっ。

「やめてくれー。んなのいるわけないじゃん！」

丘があせったように言った。俺たちの様子を見た香坂は笑いをこぼしている。

「くくっ。冗談だって。わたしだっていたらイヤだよ。」

「でも香坂ファンの男子ならいるかもな。」

むかついたから俺もささやかな仕返しを試みる。

「困る…。」

意外にも香坂はまじな顔だった。

「俺たちのことばっかいつてるけどさ、香坂さんだってかわいいじゃん！」

丘もここしかないというように言う。

「萩野と椎名がレヴェル5なら、わたしはレヴェル2だからいいのよ。」

香坂はもうこの話は終わりにしたいようだった。

「それよりもさ、ねえ椎名。あなたの自己紹介へんじなかった？」

「そうか？　べつに、ただフツウに…したつもりなんだが…。」

けっこう自信あったのになあ…。やっぱあの時クラスがざわついたの俺のせいかな…。

「ふつうなの？　あ、そう…。」

香坂はバツの悪い表情をして黙り込んだ。

丘が今まで黙っていたが目を伏せがちにかすかな声で言った。

「別にいいじゃん。凜也も高校生になって、ハッちゃけた面白いことしたただけだろ？」

「…………。」

いやそんなつもりはなかったぞ。

俺が黙り込んでしまい肯定しなかったからか、丘はあさつての方向を向いてしまった。まあ、とりあえず。丘はおいておいて、香坂だ。

「香坂はなんでそんなこといきなり言うんだよ。」

疑問に思ったことはすぐ言った方がいいだろ。ちょっとキツイ言い方になっちゃったかも。でも俺の言葉にまけじと強い言い方で香坂は返してきた。

「アレで椎名は変人って思われてたらファンも少ないかもしれないじゃない。あなたの見た目は不良っぽいから、イメージと違えば好きにならない子もいるでしょ。」

へ、変人…、不良…；、ぶろーくんはーと。

「あゝ。そういうこと。」

丘が納得したようだ。それで納得されるとつらいぜ…。そして丘はわざとらしく時計を見て言った。

「そろそろ帰らないと…。明日にでもまた写真部について考えよっか。」

どうみてもまだ帰る時間ではないけれど、丘なりの気遣いかもしれないな。この雰囲気は正直めんどくさいから今日はここにしまった方がいいな。

一日たてば治まるだろう、ってな。

でもなんで俺の自己紹介の話題でこんなことになるのやら……。自信
なくなっていくよな、全く……。

そのまま微妙な空気だったが、とりあえずこの日はわかれた。

彼らのオモウコト。 3 (後書き)

二ヶ月もたってしまつてスイマセン… (× ×)

こんな調子ですがよろしくお願いします。 W

久しぶりなので、矛盾点があつたらどんどんおっしゃって下さい。

彼らのオモウコト。4

「なあなあ、俺って不良に見えるか？」

外見は不良と言われて気になった俺は、翌日近くにいたクラスメイトの一人に聞いてみた。一応言っておくがそのクラスメイトは男だぞ。女の子と話したい、とかじゃねえからな。

「別に。」

そのクラスメイトの反応は冷たかった。泣けるわ…。

「……そ…そーかよ。さんきゅ。」

俺のことが嫌いなのもしれねえし、とりあえず答えてくれたことにお礼を言って俺はそそくさとその場を去ろうとした。

「見えますよ。」

「あ？」

突然俺に話しかけてきた人に、思わず すごんだ声を出してしまった。よく見たらクラスメイトの女子じゃん。やっべ…。

一応言っとくと、さっきの男子とは違う人だからな。こっちは女子だぞ、女子。いや、別に嬉しいわけじゃねえし…！

「あ、すみません。いきなり。」

話しかけてきた女の子が俺を驚かせたと思ったようで、あやまってきた。

「大丈夫…だけど、どーいうこと?」

「不良に見えますよ、ってことです。さっき遊佐くんに聞いてましたから。」

遊佐って…? ……ああ、さっきの冷たいクラスメイト(男子)のことか。

「……やっぱ見える?」

「うちは、そう見えると思います。人によって違うかもしれませんが。」

「…………。」

しょーっく! クラスメイトの女子、大して仲良くもない子に言われるとなると真実なんだろうな…。

「いいんじゃないですか。不良に憧れてる人もいますし、ね。」

「そーか? ……ふーん…。」

憧れてる人もいるのかあ…。じゃあ別にいいかもな…。……うわあ、俺って単純だな。それにしてもこの子ハッキリいう子だよなー。

「名前、なんて言うんだ?」

「酒井です。 あなたは椎名さんですよ。 自己紹介が印象強かったので覚えてますよ。」

「……………」

やっぱり自己紹介そんなに目立ってたのかよ…。そこはスルーだ、スルー。

「あんがと。酒井、な。これから一年間よろしく。」

「そうですね。…では。」

あまり長く話していたくなかったようで、先ほどのクラスメイト（男子）とは逆に相手から話の終わりを告げられた。名字しか教えてくれなかったし、敬語だし、そんなに親しくしてほしくないんだろうな。いや、敬語はそんなに仲良くない人相手だったら使う人もいるか…。

「椎名。酒井さんと話してたよね？」

結局、放課後、なにもいわずとも集まった俺たちだった。三人いないと休部になっちまうらしい…。入部まで一応部活のメンバーで会っておきたいところだ。

香坂の質問に俺は答える。

「まあな。たいしたこと話してねえけど。」

「ハキハキした子だよ、酒井さんって。」

「ああ。俺じゃなきゃグサつとくるような言葉だったなーww」

「そうよね、だって椎名は……。」

そこまで言って香坂は黙り込んだ。続きが気になるじゃねえかよ。

「ん？　俺が…なんだ？」

「椎名は　なんかそんなこと気にしなさそう。変人だし。」

「ひでえな！」

くすくすと香坂は笑いをこぼした。俺ってそんなに変人…？　内面は変人＋ルックス不良って…。

「なんか二人が、二人だけで楽しそうだから俺帰ろっかな。」

後から丘がぼやいてきた。すっかり忘れてたぜ、丘のこと。

「あ、いたの。」

香坂が俺の思ったことを言ってくれた。

「しくしく…。ホントに帰ろー…。」

「冗談、ジョーダン、靴。元気出せ。」

俺はかわいそうになったので丘に話しかけた。

「靴って…。俺はジョーダン履いてないし…。冗談って言いたいの
か言いたくないのかよく分かんないし…。」

丘はテンション低めにツツコミをいれてきた。満足満ぞく。合格だ
ぜ。

「えっ、残念。でもこれから靴はジョーダンにしてね！ だってあ
なたの存在自体、冗談だけで できてるようなものだもんね。」

「…orz」

丘は香坂の毒舌にたえきれず沈んでしまったw 香坂はニコニコ笑
っている。2828。

楽しいなあ、この部活。俺は写真部に入ろうと改めて決めたのであ
った。

彼らのオモウコト。 4（後書き）

今回は二人新しい人が出てきましたが、おそらくあまり出てこない
ので流していただいても大丈夫です。

冥沙

彼らのオモウコト。 5（前書き）

今回は、萩野丘視点です。

時系列でいうと一話の後半ぐらいですね。

それと、一話をすこし変えました。

話自体の流れは変わらないのですが、伏線の一部カットしました。

あからさまで分かりやすすぎるためと、一話でそれを出してしまうと凜也のイメージがうまくまとまらないと考えたためです。

作者の都合で申し訳ありません。

彼らのオモウコト。5

*****萩野丘

凜也は、第一印象は怖いやつだと思っていた俺だけれど、話してみるとそんなやつでもないのかもしれないと思うようになってきた。俺しか知らないことを当ててきたことが初対面なのに何回かあった。俺は驚いてしまったが、ただなんとなく言ったことがたまたま的中しただけなのかもしれない。

なぜかって？

凜也がバカそうだからだよ。

凜也は俺が最初に思ったほど頭が回るようには見えない。ウソをつくようなかんじもしない。

見た目と中身にギャップがあるのは変だと思っているけれど、俺も人のことを言えないので、おそらくいつになっても凜也に言うことはないだろう。

それに、わざとギャップがあるようにしてモテたい…とか？

凜也ならそんな理由もありそうだ。

そんな風に思わせてしまうような愉快的凜也の人柄に俺は好感をもった。話していても楽しいし…。

写真が好きそうには見えない凜也を、つい写真部に入ろうと誘ってしまった。

勢いで言ったことだし。どうせすぐに断られると考えていたのだけれど、意外と凜也は悩んでいた。

俺にとって嬉しい誤算だった。とりあえず見学に行くことになった

ので俺は凜也に入ってほしいと思っている。

「ココが写真部…？」

俺たちは写真部の見学に行こうと約束したとおりに部室前に来たのだが…。

写真部は活動していなく、さらにただの教室に見えるその部室に俺は思わず声をあげてしまった。

「ああ、そうみたいだな…。」

凜也は意外と落ち着いている。そんなもんだと思っていたのだろうか…。

「そんなこと言ったってさ、凜也はこのただの教室が写真部に見える？」

「いや、見えねえな。」

凜也にきっぱりと断言された。やっぱり見えないよなー…。

「だって人も誰一人いないじゃんか。」

俺は思わず口に出してしまった。見ると凜也はぼーっと立っていた。何かを考えているようだ。

トントン

ノックがあつてから間があつた。俺らはこの部室に初めて来たのだし、どうすればいいのかよく分からず困惑する。

「失礼します。見学に来たのですが。」

誰からの返事もないのでしびれをきらしたようで、ノックをした人が入ってきた。部室を見回し、そして俺たちを見た。

「えっと、同じクラスの……椎名くんと萩野くんだよね。」

その女子生徒は俺らのことを知っているみたいだ。え、前に会ったことあるっけ…？

かわいい子だから知り合いだったら忘れないと思うんだけど…。凜也がアイコンタクトをしてきた。どうやら凜也の方も知らないようだ。

「あ、ごめんね。わたしはクラスメイトの香坂紀莉。」
こうさかきり

「ごめん！ まだクラスメイトの顔覚えてなくてさ…。」

クラスメイトぐらい覚えてなきゃダメだったなあ…。失敗した…。

「まだ二日目なんだから当たり前だよ。」

俺らが覚えていなかったことに香坂さんは怒ってはいないみたいだ。

よかった。

だってかわいい女の子に嫌われたくないし！

それにクラスメイトだからどうしても一年間は関わるし、同じ部員ならもつと関わることになるだろう。

特別綺麗というわけではないけれど、かわいい女の子である香坂さんに俺はちよつと惹かれていたみたいだ。

だから俺は、香坂さんと凜也と写真部に入れたらいいなあ、と思った。

凜也という変人がいるから香坂さんがいると丁度帳消しになって写真部にもいいだろうしね。

彼らを紹介するぜ★☆（前書き）

人物紹介です。

まだそんなに人もでていない上に性格も分かっていませんが、少しずつ更新していきます。最新話以降のネタバレはありませんが、最新話を読んでいない方はこれとはばしてください。

彼らを紹介するぜ★☆

椎名凜也

性別 .. 男

身分 .. 佐間高校1-2・主人公

身長 .. 173cm

見た目 .. 不良のような格好をしている。けっこう男前でかっこいい。モテモテ。

よくスカウトされるらしい。モデルとしてやっていけるぐらいかっこいい。

髪はすこし長め。といってもそこまでではない。最近はやってる感じの。チャラチャラ茶髪。

萩野丘

性別 .. 男

身分 .. 佐間高校1-2・準主人公

身長 .. 171cm

見た目 .. スポーツ少年のかっこよさ。こいつもまたモテる。でも凜也ほどではない。

髪型はふつうにかっこよく。黒髪。サッカー少年（高校）を思い浮かべるのじゃ！

香坂紀莉

性別 .. 女

身分 .. 佐間高校1ー2・準主人公

身長 .. 155cm

見た目 .. 高校一年生にしては小さい身長。よくいるかわいい女の子、ぐらい。

それほどのかわいさでもない。セミロングで軽くパーマ。

濃い茶髪。ふわふわした感じ。

— — —
— — —
— — —
— — —
— — —
— — —
— — —
— — —
— — —
— — —
— — —
— — —
— — —
— — —
— — —

酒井さん

性別 .. 女

身分 .. 佐間高校1ー2

身長 .. 160cm

見た目 .. メガネをかけている。髪はショートで黒。

その他 .. 思ったことはズバツと言う。委員長タイプ。一人称あんま出てこないけどわたし。

遊佐くん

性別 .. 男

身分 .. 佐間高校1ー2・剣道部

身長 .. 173cm

見た目 .. 和風なかんじ。そこそこカッコいい。黒髪。(紀莉が男だ

ったら同じくらいのレヴェル）
その他…無口。剣道部所属。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1673/>

Take pictures

2010年10月9日21時58分発行